- チームマネージャーがインスペクターの報告書の妥当性をチェックする（クオリティ・インシュランス）

と言ったことが監察の評価基準及びその妥当性の保管として挙げられる。

カリキュラムの対象区分

1. ８歳以下の児童全てを対象としたスタンダード(standard for all under age 8)
2. ３歳から５歳までの基礎ステージのカリキュラムガイドライン(nursery follow 3-5 curriculum guidance)
3. ０歳から３歳からのガイダンスである(“Birth to three matters”)

3.は義務ではなく、推奨されるガイドラインという扱いとなっている。

現在は上記のカリキュラムを用いて監察が行われているが、2008 年９月１日から新しい「幼年期基礎ステージのためのカリキュラム」が策定される。これによって、３歳から５歳に関しては、これまでの３つのカリキュラムが一つに統合される予定。私立、公立、学校、ボランティアとこれまで供給者が異なっていたものに対して一つのカリキュラムで対応していくことになる。

評価基準

６つの基準が設定されている。

- からだづくり(Being Healthy)
  - ＜健康＞
  - ＜食育＞
- 安全(Staying safe)
  - ＜物理的環境＞
  - ＜教具教材＞
  - ＜安全性＞
  - ＜子どもの保護＞
- 楽しみと達成(Enjoying & achieving)
  - ＜ケアと学びと遊び＞
- より良くするために(Making a positive contribution)
  - ＜機会均等＞
  - ＜特別支援＞
  - ＜ふるまい方＞
  - ＜保護者との関係＞
- 組織(Organization)
  - ＜適材適所＞
  - ＜記録＞

＜組織編成＞

※ ただし、監察報告書の判断材料としては用いられない

- 経済的によくあるために(Economic well-being)

※ 家庭環境に深く関係するために調べることが難しいため、判断材料としては加味されない。

監察報告書では、６つの基準のうち、上から４つの基準にそれぞれ４段階評価を与える。

監察の評価を裏付ける根拠を集める（evidence-base）

- 観察と子どもとの会話
- 養育者や職員が子どもとどのように関わっているのかを観察
- 養育者、マネージャー、職員との会話
- 保護者との会話
- 計画と記録の参照（特に子どもの成長と課題）

判断基準は明示されているが、施設内における様々な場面における「子どもの様子」を監察の主体とするため、監察官は上記のような視点を理解した上で実践を記録できる能力・視点が求められる。監察官の多くは、就学前教育の実践に携わっていた経験のあるものが多いが、監察官として改めて研修を受けCCIとしてOfstedから認定される必要がある。監察官の初任者研修は１週間で、加えて、時々に必要に応じた継続研修が行われている。監察はOfstedが直接行うこともあれば、各地域で監査官を派遣する機関を通して行われる場合もある。現在、Ofstedでは約700名のCCI、委託機関の監査官は約1100名登録されている（http://www.ofsted.gov.uk)。

監察官は月に１０件ほどの調査を担当する。主な調査内容には、監察、追証、登録審査などがある。

ちなみに、2006年の訪問時点では、学校監察官の年収は40000から45000ポンドであるのに対し、幼年期監察官の年収は25000から26000ポンドであり、現在組合で問題にされていた。

幼年期の監察における４段階の評価基準について

- 秀逸 outstanding
  - とても少ない。全英にある約110000の施設のうち約４％に過ぎないが、近年その結果が上がってきている（2005-2006では4%であったが、2006-2007では5%に上昇している）（http://www.ofsted.gov.uk)
  - 改善のための推奨は示されない。Ofstedはoutstandingの施設には示せないと考えているが、秀逸であっても、監察は３年ごとに受けることになっている。
  - 評価は、常に複数で行われ、また、上位組織によって確認されるが、秀逸の評価は上級調査官（senior manager）の合意を必要とする。

- 良 good
  - 義務ではないが改善のための推奨を少なくともひとつは提示される。例えば、よりきちんと記録をとるように、教材をより有効に活用するように、といった改善策が推奨される。
- 可 satisfactory
  - 良と同じように改善のための推奨が少なくともひとつは提示される。
- 不可 inadequate

  不可は二つのカテゴリーに分けられる

  <カテゴリー１>
  - 自助努力によって改善の余地があるもの
  - 再監察は一年以内に行われる
  - このカテゴリーにおいては外部からの介入は行われない

  <カテゴリー２>
  - ３ヵ月から６ヵ月以内に再監察が行われる
  - それでも改善されなかった場合には法的措置をとったり、直接の統制下においたりという措置がとられる可能性がある
  - 昨年度は２００の施設が閉鎖された（評価マニュアルの７５ページ参照）

監察評価が不可で、カテゴリー２に該当する場合、登録の抹消、法的な警告、施設の閉鎖を要求する訴訟を含む措置をとることがある。

４．Ofsted による実践評価の現実と今後

Ofsted は、The new Ofsted Strategic Plan 2007-2010 という研究計画において、”Raising Standards, improving lives”というスローガンをあげて教育と生活の質の向上を図っている。今回の再編に伴って、教育機関における教育水準の評価という性質だけではなく、子ども達を取り巻く生活環境全般（保護者・地域社会とのかかわりなど)、生涯教育の分野まで管轄下に置き、福祉的要素の視点が加わった感がある。そう言う意味では、まさに 1988 年の教育改革法に準拠した教育監察法 2006 が具現化して、子ども達の教育・生活の質の維持・向上を進めていこうとしていると言える。

ただ、その施行に伴って評価される側である施設の置かれている立場と言えば、日々恐々としている所も多い。実際に、Essex にある就学前教育施設を数カ所訪問したが、訪問に際して「評価をしにきたとは絶対に思わせないように」と配慮を求められた。施設長によれば、監察官は保護者や廊下で遊ぶ子ども達にも話しかけ種々の情報収集に努めるとのことであった。訪問者が、子ども達に話しかけることに対しても気を配らねばならない事実がそこには存在していた。施設長だけでなく、監察官の立ち入りをプレッシャーに感じる実践者達は多い。観察結果は Ofsted のサイト上で完全公開されるため、その評価がそのまま子ども獲得の指標として保護者から用いられるようである。現実問題として、子どもを預

けようと施設を検索している保護者がかける電話の第一声は「そちらの評価は何でしたか？」ということであれば、突然ドアを叩いてやってくる監察官を恐れるな、と言う方が難しい。ただ、日々このプレッシャーにさらされることによって「日頃の保育を大切にしていれば、いつ来てもらっても大丈夫」という、日々を振り返りその研鑽の基に生成する保育実践を歓迎する声もある。

イギリスの就学前教育施設は多種多様であり一定の質を保たせることは難しいが、現在、０－３歳、３－５歳のカリキュラム整備も進んでいる。各学校単位に自由に教育内容を任せていたイギリスにあっても、政府主導のナショナルカリキュラムで教育水準をコントロールし、更に、監察というシステムを導入して、その水準の維持・向上に努めている。各施設単位で行われる評価表だけで保育の質の維持向上を求めて行くには不十分であるとする根拠、また、その判断に基づいて監察体制を敷くことの意義そのものを検証することが肝要であろう。

参考文献

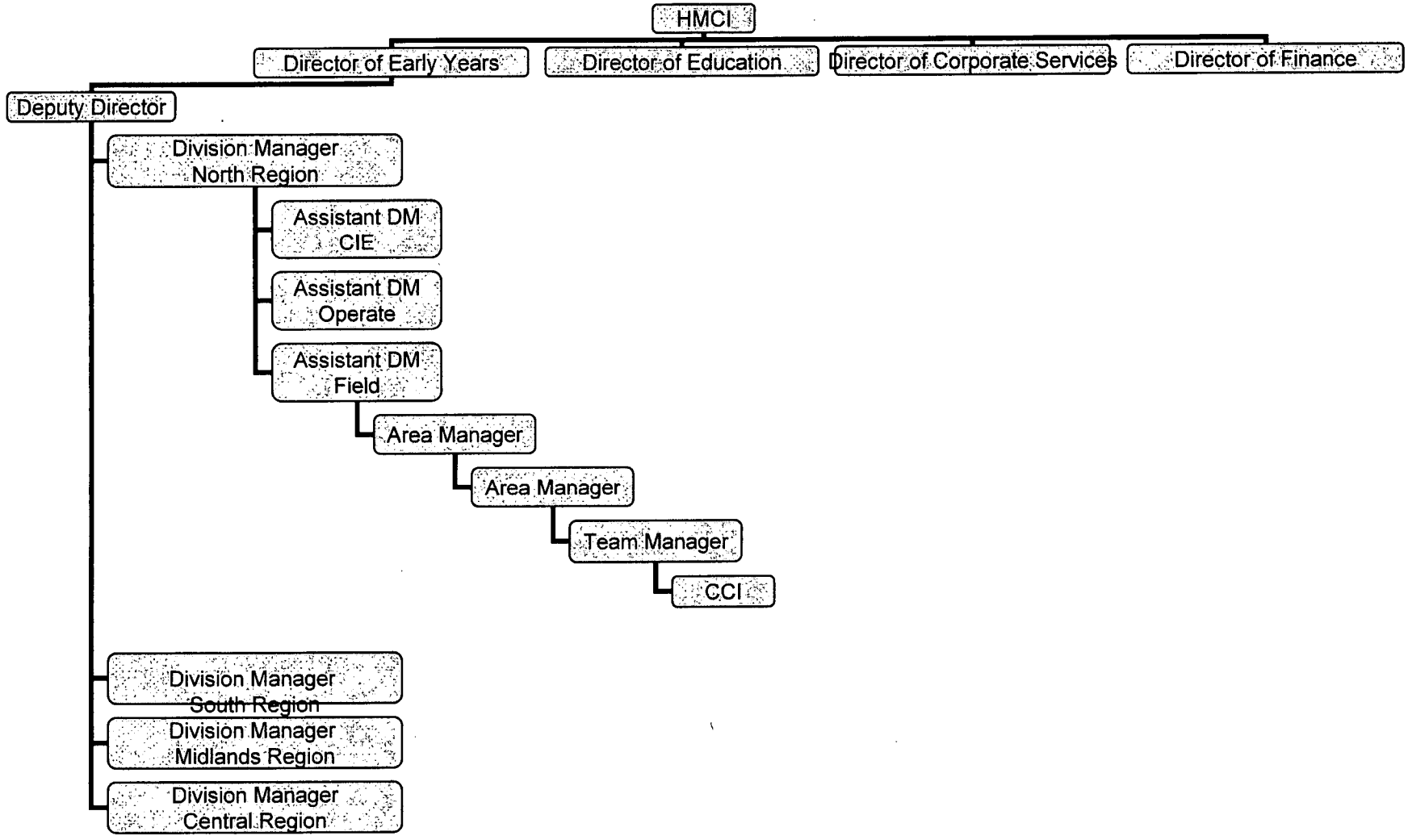
吉田多美子（2007）　フィンランド及びイギリスにおける義務教育の評価制度の比較　－学力テスト、学校評価を中心に－　国立国会図書館調査及び立法考査局　2007.5

山本和美（1998）　保育の質的向上を目指すイギリスの新しい動きとその示唆するもの－保育の目標「望ましい結果」と保育の評価を中心に－　乳幼児教育学研究 7, pp. 3-13.

Ofsted http://www.ofsted.gov.uk

QCA http://www.qca.org.uk/default.aspx

OfstedにおけるInspectorの組織図



聞き取りにより作成（2006年時点）

Ofsted inspections

Burns, J. (2000). *'Improvement through Inspection'? An Investigation of Teachers' Perceptions of OFSTED as a Vehicle for Improvement* (University of Central England Faculty of Education Papers, Issues in Education Series No.5). Stoke on Trent: Trentham Books.

Centre for the Evaluation of Public Policy and Practice and Helix Consulting Group (1999). *The OFSTED System of School Inspection: an Independent Evaluation.* Uxbridge: Centre for the Evaluation of Public Policy and Practice.

Davies, D. and Rudd, P. (2001). *Evaluating School Self-evaluation* (LGA Research Report 21). Slough: NFER.

Ferguson, N. and Earley, P. (2000). 'Testing beliefs about school improvement before and after inspection', *Education Today*, **50**, 2, 38-45.

Ferguson, N., Earley, P., Ouston, J. and Fidler, B. (1999). 'New heads, OFSTED inspections and the prospects for school improvement', *Educational Research*, **41**, 3, 241-9.

Gray, B. (1999). 'Ofsted inspection, round 2: an improving experience for school governors?' *Education Today*, **49**, 4 , 38-46.

Great Britain.Parliament.House of Commons.Education and Skills Committee (2004). *The Work of Ofsted* (HC 426). London: The Stationery Office.

Great Britain. Parliament. House of Commons. Education and Employment Committee (1999). *The Work of OFSTED. Volume I: Report and Proceedings of the Committee* (Fourth Report). London: The Stationery Office.

Lee, B. (2001). 'OFSTED inspections and the impact of special measures', *Educational Review*, **14**, 2, 69-73.

Macbeath, J. and Oduro, G. with Lightfoot, S. (2005). *Inspection and Self-evaluation: a New Relationship?* London: National Union of Teachers.

Matthews, P. and Sammons, P. (2004). *Improvement through Inspection: an Evaluation of the Impact of Ofsted's Work.* London: OFSTED.

Office for Standards in Education and Audit Commission (2000). *LEA Support for School Improvement: Framework for the Inspection of Local Education Authorities. Effective from 1 September 2000* (HMI 228). London: OFSTED.

Office for Standards in Education (2006). *Ofsted Strategic Plan 2006 to 2007 6* (HMI 2658). [online]. Available: http://www.ofsted.gov.uk [1 June, 2006].

Office for Standards in Education (2003). *Inspecting Schools: Framework for Inspecting Schools. Effective from September 2003* (HMI 1525). London : OFSTED.

Office for Standards in Education (2004). *The Annual Report of Her Majesty's Chief Inspector of Schools 2003/04* (HC 195). London: The Stationery Office.

Scanlon, M. (1999). *The Impact of OFSTED Inspections*. Slough: NFER.

Shaw, I., Newton, D.P., Aitkin, M. and Darnell, R. (2003). 'Do OFSTED inspections of secondary schools make a difference to GCSE results?' *British Educational Research Journal*, **29**, 1, 63-75.

Smith, G. (2000). 'Research and inspection: HMI and OFSTED, 1981-1996 - a commentary' (Special Issue: The Relevance of Educational Research), *Oxford Review of Education*, **26**, 3 & 4, 333-52.

Winkley, D. (1998). 'An examination of Ofsted', *Primary Practice*, **15**, 39-44.

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）
分担研究報告

アメリカ合衆国における保育の質の研究動向に関する研究

分担研究者　鈴木 正敏　兵庫教育大学学校教育研究科准教授

本研究は、アメリカ合衆国における保育の質に関する資料ならびに保育の質に関する評価ツールを収集し、現状とともに研究動向を学ぼうとするものである。評価システムとしてのNAEYCの認証制度や、保育環境スケール、CLASSについてそれぞれ検討を加えた。保護者の選択が容易になるという点と、保育者自身による客観的な自己評価、社会に対する説明責任などをこれらの評価ツールに見ることができる。

A．研究目的

本研究は、アメリカ合衆国における保育の質とその評価ツール関する資料を収集し、現状とともに研究動向を学ぼうとするものである。

B．研究方法

保育の質に関する評価ツールのうち、主たる3つを収集し、分析した。また、その評価ツールに関わる論文を検索し、内容ならびに方向性について検討した。

C．研究結果

今回取り上げた、NAEYCのアクレディテーション、保育環境スケール、CLASS、といった保育の質に関する評価基準は、それぞれ役割と重点を異にしている。NAEYCは、アクレディテーションによって、外部評価機関としての地位を確立している。その方針としては、乳幼児に撮って発達的に適切な実践を行うために、保育環境の充実を不可欠なものとして捉えている。しかし認定までのプロセスはかなり長いものであり、評価を得るためには園全体が保護者を巻き込んでかなりの努力をつぎ込む必要がある。一方、保育環境スケールは、そのような外部評価とは関係なく、純粋に保育環境を診断し、質の向上に役立てるためのものとなっている。CLASSのスコアリング・システムは、他の2つの例とさらに異なり、教育的（あるいは指導的）営みの質をどうとらえるかに、その重点を置いている。

D．結論

アメリカ合衆国における保育の質は、向上させるべきにもかかわらず、限られた予算や政策の優先順位によって、望むべき水準に達していないように見受けられる。それは、質の高い保育の不在ではなく、地域や園による質のばらつきが大きいのだと考えられる。保育の質を見るべきなのは保護者たち自身であるが、地域を越えて情報を入手しがたい状況がある。また、説明責任が求められる社会であるので、質の評価を容易にできるように、という力が働き、NAEYCのような認証制度が発達してきたのではないだろうか。このような背景を踏まえ、日本での議論にどう資するかを考えるべきである。

＜資料１＞

アメリカ合衆国における保育の質の研究動向

アメリカ合衆国においては、保育の質についての議論は早くからなされてきた。その遠因は、1950年代より始まった保育ニーズの増大による保育施設の乱立から、その質のばらつきが懸念されてきたことによる（中川、2004)。保育の高い質を求めて、1980 年代以降に、その研究が実質的な意味をもつようになる。1979 年に全米を対象に行われた The National Day Care Study は、1）スタッフと子どもの割合、2）グループのサイズ、3）スタッフの教育、の 3 点を、保育の質を決定づける重要な要素として見いだしたものとして、それらの研究の出発点となっている（藤川、1990)。こうした質の保障に関する議論は、全米レベルでの保育者や保育研究者らによる努力によって、形となっていく。

1　NAEYC によるアクレディテーション（質の認証評価）

保育者のネットワークとして、また専門的な保育研究の学会組織として 1926 年に設立された National Association of Education for Young Children (NAEYC、全米乳幼児教育協会)は、1985 年に National Academy of Early Childhood Programs を設立し、乳幼児の保育に関する質の基準を設けて、評価を行うこととなった。任意団体である、このアカデミーによって、全米共通の評価基準が定められ、各保育施設がそれぞれに評価を受けている。この評価基準によって Accreditation（評価認定）を受けたかどうかが、保護者が保育施設を選ぶ際に、質を客観的に見定めるための手がかりとなっている。

認定を受けるには、1）園自体がまず自己点検・評価を行い、2）アカデミーから派遣された査察員によって評価を受け、そして 3）認定委員会による決定を受けて、初めて認定証を交付される。このプロセスには、約半年から 2 年程度の期間を要し、園全体で取り組むことが必要となってくる。このように、認証プロセスはかなりの努力を必要とするのであるが、そのことが園にかかわる保育者・職員全体の意識の向上と、子どもの保護者らの質に関する認識の啓発に役立っている。

具体的な認証評価プロセスは以下の通りである。

1）園による自己点検・評価

園による自己点検・評価には、アカデミーから発行されているマニュアルに基づき、130 項目にわたる基準についてチェックすることが求められる。その項目は、以下の 10

分野にわたっている。

A　保育者と子どものやりとり

B　カリキュラム内容

C　保育者と家庭とのやりとり

D　保育者・職員の質と研修

E　施設の管理運営

F　クラスあたりの人数と保育者の配置

G　物理的環境

H　健康・安全

I　栄養と食事

J　園全体の評価

これらの各分野の項目について、1〜3の評価基準でチェックをする。それには、保育室での観察、管理職によるレポート、保育者・職員のアンケート、保護者のアンケートが含まれており、AからJまでの分野で、関連するものがそれぞれ関係する者に割り当てられている。こうしたチェックをもとに、園としてのプログラム報告書を書き上げ、評価のための査察員訪問に備えることになる。

2）査察員による視察訪問・評価

園としてのプログラム報告書を踏まえ、アカデミーから派遣される査察員によって、園の視察訪問が行われる。査察員は、自己点検・評価の際に用いられたものと同じ評価項目を使用してチェックを行う。ここで、自己点検・評価の内容と、現地で視察した内容とが著しく異なっている場合は、運営管理者（園長など）から説明を聞いて、それをアカデミーに報告することとなる。自己点検・評価では、評価そのものが甘くなったり、逆に厳しくなりすぎたりする点をチェックし、客観性を持たせるための視察訪問である。

3）アカデミーによる認証評価

自己点検・評価と、査察員による視察訪問・評価が終わると、その報告を受けてアカデミー内に設けられた委員会（3人1チーム）によって認証評価の判断が下される。認定がおりると、認定証が発行される。多くの園では、アカデミーによる認定を受けたことを知らしめるために、入り口の目立つところに「認定済み」と表示したり、認定証を飾ったりしている。この認定は5年有効（開始当初は3年のみ有効であった）であるが、継続して認定を受けるためには、認定期間が終了する前に、再び同じプロセスを経て認

定を受けなければならない。

この認証評価システムは、全米的に認知されており、認定されているかどうかが、質の高い保育施設を運営する上での基準となっている。この認定基準は、1987 年に出された Developmentally Appropriate Practice in Early Childhood Programs Serving Children From Birth Through Age 8（乳幼児の発達にふさわしい教育実践）の考え方に沿ったものであり、物理的な環境や人員配置だけでなく、カリキュラム内容や子どもや保護者とのやりとりなどに注目してチェックリストが作られている。

2　アクレディテーションの拡大と連携

NAEYC によるアクレディテーションは、その後さまざまな影響を及ぼし、施設保育のみならず、家庭保育や学童保育などにも広がりを見せている。National Association for Family Child Care (NAFCC、全米家庭保育協会)は、1988 年にアクレディテーションのシステムを開始した。 また、National AfterSchool Association (NAA、全米学童保育協会)も、1997 年からシステムを開始している。これら 3 つの協会によって、施設保育・家庭保育・学童保育のそれぞれの基準が設けられ、質の評価が行われるようになった。2007 年現在では、NAEYC による認定施設が約 10000、NAFCC による認定プログラムが 2048、NAA による認定プログラムが 569 となっている。

3　保育環境スケール（ITERS／ECERS）について

アメリカ合衆国における保育の質の評価に関しては、NAEYC に代表されるアクレディテーションの評価基準の他に、Harms らによる保育環境スケールがある。これには乳児版の ITERS と幼児版の ECERS とがある。これらは、1 から 7 までのスケールで ITERS では 39 項目を、また ECERS では 43 項目を評定するように作られている。それらは以下の 7 分野にわたっている。

I.　空間と調度品等
II.　個人的な日常のケア
III. 聞くことと話すこと
IV. 活動

V. やりとり

VI. プログラムの構成

VII. 保護者と保育者・職員

ECERS ならびに ITERS に関連する研究は、米国での応用研究や評価研究だけでなく、各国におけるスケールの適応例や、または文化に合わせる形での改訂版の評価などがなされている。日本においては、埋橋（2004）により『保育環境評価スケール①幼児版』『保育環境評価スケール②乳児版』として翻訳版が出されており、現場への適用がなされて検証されている。

研究成果としては、質の向上に役立ったとするような肯定的な結果を出したものもあるが、中にはこのスケールが保育の構造を評価しておりプロセスの評価になっていない、とするもの（Cassidy et. al、 2005）もあり、今後の改善も期待されている。

4　クラスルーム評価システム(CLASS)について

このツールは、Foundation for Child Development と U.S. Department of Education の助成を受け、National Center for Early Development and Learning (NCEDL)が開発した Classroom Assessment Scoring System(CLASS)と呼ばれるものである（Pianta、 et al.、2008)。発行は 2008 年となっている。

ここでは、保育における質は、1）情緒的支援、2）部屋の構成、3）教授的支援、の 3 つの領域から測られるとしている。この 3 つの領域は、それぞれ細分化された要素が挙げられている。

1）情緒的支援

・肯定的な雰囲気

・否定的な雰囲気

・教師の敏感さ

・子どもの視点の認識

2）部屋の構成

・行動管理

・生産性

・教材のあり方

4) 教授的支援

・概念形成

・フィードバックの質

・言語によるモデリング

これらのポイントをもとに、観察を行うことになっている。観察は、学校が始まると同時に行われる。すべての時間を観察するのではなく、30 分のサイクル（20 分観察し、10 分記録する）がとられる。少なくとも、そのサイクルを 4 回繰り返すことになっているが、スコアシートは 6 枚綴られており、その程度のサイクルを目指すようになっている。

スコアは、1 から 7 までのスケールで採点することになっている。教育活動が主な焦点となっているので、3 歳から 5 歳を対象とした Pre-K のマニュアルでも、活動内容については、言語・数学・科学・社会・芸術・その他、から丸をつけるようになっている。活動の指導形態としては、ルーチン・クラス全体・小グループ・個別・食事・選択やコーナー活動、の 6 場面から選ぶようになっている。

それぞれの項目には、さらに詳しい説明が加えられており、例えば「概念形成」の項目においては以下のような細目が立てられている。

分析と推論

「なぜ」「どのようにして」という質問

問題解決

予想／実験

分類／比較

評価

創造

ブレインストーミング

計画

生産

総合

概念を結びつける

既有知識との統合

現実世界へのつながり

現実世界への応用

自分の生活への関連性

このスコアリングシステムを利用した研究論文は少なく、開発者本人らによるもののみ（Pianta、 et. al、 2004）であるが、今後この評価方法を用いた論文が出てくることが期待される。

5 まとめ

これまで見てきたNAEYCのアクレディテーション、保育環境スケール、CLASS、といった保育の質に関する評価基準は、それぞれ役割と重点を異にしている。NAEYCは、アクレディテーションによって、外部評価機関としての地位を確立している。その方針としては、乳幼児に撮って発達的に適切な実践を行うために、保育環境の充実を不可欠なものとして捉えている。しかし認定までのプロセスはかなり長いものであり、評価を得るためには園全体が保護者を巻き込んでかなりの努力をつぎ込む必要がある。一方、保育環境スケールは、そのような外部評価とは関係なく、純粋に保育環境を診断し、質の向上に役立てるためのものとなっている。NAEYCのように査察を受けることもないので、容易に使用できたり、文化を超えて広く使われたりしている実績がある。反面、客観性という点や、文化の多様性に合致するか、といった問題も抱えている。また、環境の構造的点だけではなく、保育におけるダイナミックな子ども同士や子どもと保育者とのやりとりを、どのように評価できるかが課題として挙げられるだろう。CLASSのスコアリング・システムは、他の 2 つの例とさらに異なり、教育的（あるいは指導的）営みの質をどうとらえるかに、その重点を置いている。乳幼児のケアの場面を想定しているのではなく、幼稚園以上の学校という場面で使われるものがもととなっているため、そうした教育面が主となっているのである。

アメリカ合衆国における保育の質は、その向上を望まれつつも、限られた予算や政策の優先順位によって、なかなか思うような水準に達していないように見受けられる。それは、質の高い保育がなされていないというのではなく、地域や園によってみられる質のばらつきの程度が大きいのだと考えられる。保育の質を見ることをもっとも強く要求されるのは保護者たち自身であるが、地域を越えて情報を入手しがたい状況がある。また、説明責任が求められる社会であるので、質の評価を容易に分かりやすくできるように、という力が働き、NAEYCのような認証制度が発達してきたのではないだろうか。

こうした文化的・社会的背景を踏まえた上で、アメリカ合衆国における保育の質に関する研究が、日本における保育の質に関する議論にどう寄与することができるかを考えなくてはならないであろう。

＜資料２＞

＜＜＜NAEYC アクレディテーション関連の論文＞＞＞

ERIC #:ED272274
Title:Guide to Accreditation by the National Academy of Early Childhood
Publication Date:1985

Abstract:Intended for use with "Accreditation Criteria and Procedures of the National Academy of Early Childhood Programs," this guidebook is designed to help early childhood educators in their progress through the process of program accreditation by the National Academy of Early Childhood Programs. Provided are (1) instructions and materials for conducting an in-depth self-study of an early childhood program, including sample copies of the Early Childhood Classroom Observation, Administrator Report, Staff Questionnaire, and Parent Questionnaire that are used during the self-study and in reporting findings; (2) a copy of the Program Description that is used by programs to report their compliance with criteria to the Academy; and (3) a description of the validation process and the accreditation decision. Section 1 provides an introduction to the guide. Section 2 offers directions for conducting a self-study. Section 3 focuses on the use of the classroom observation form. Section 4 guides the completion of the administrator report and center profile. Sections 5 and 6, respectively, give directions for using the staff and parent questionnaires. Sections 7, 8, and 9 concern the preparation of the program description, preparation for the validation visit, and aspects of the accreditation decision. Related reference materials are cited in the bibliography comprising Section 10. (RH)

Institutions:National Association for the Education of Young Children,
Washington, DC.
ISBN(s):ISBN-0-912674-93-8
Descriptors:Accreditation (Institutions); Classroom Observation Techniques; Curriculum Evaluation; Early Childhood Education; Personnel Evaluation; Physical Environment; Program Descriptions; Program Validation; Questionnaires; Self Evaluation (Groups)

ERIC #:EJ757462

Title:Improving and Sustaining Center Quality: The Role of NAEYC Accreditation and Staff Stability

Authors:Whitebook, Marcy; Sakai, Laura M.; Howes, Carollee

Publication Date:2004

Abstract:Research Findings: This study examines child care centers that improved quality and sustained these improvements over time. Quality was assessed using the Early Childhood Environment Rating Scales (ECERS). Forty-three centers were visited three times over six years. Centers that substantially improved by Time 2 were not initially rated better than those that did not improve but did employ less harsh teachers. At the second visit, centers that improved substantially were higher in quality, employed more sensitive and less harsh teachers, had experienced lower teaching staff turnover, and achieved NAEYC accreditation. The vast majority sustained these improvements. Centers seeking NAEYC accreditation were more likely to become accredited if they received moderate to intensive support and experienced less teaching staff turnover. Centers were more likely to experience lower turnover if they paid staff higher wages. Practice or Policy: Resources to support centers in becoming accredited and to increase the retention of teaching staff can assist centers in improving and sustaining quality.

Journal Name:Early Education and Development

Journal Citation:v15 n3 p305-326 2004

Descriptors:Child Care Centers; Young Children; Rating Scales; Accreditation (Institutions); Child Care; Educational Improvement; Faculty Mobility; Teacher Salaries; Labor Turnover; Early Childhood Education

ERIC #:EJ590134

Title:NAEYC Position Statement on Developing and Implementing Effective Public Policies To Promote Early Childhood and School-Age Care Program Accreditation.

Publication Date:1999

Abstract:Contends that accreditation alone is not the solution to problems facing early childhood and school-age education programs. Presents seven recommendations for program accreditation. Suggests that stakeholders should also continue to refine standards and practices, focus on integrating accreditation policies into comprehensive plans, view accreditation as ongoing process, continually implement standards, and involve broader public in developing creative initiatives. (LBT)

Journal Name:Young Children
Journal Citation:v54 n4 p36-40 Jul 1999

Descriptors:Accountability; Accreditation (Institutions); Accrediting Agencies; Citizen Participation; Early Childhood Education; Educational Objectives; Financial Support; Program Development; Public Support; School Age Day Care; Standards; Teacher Education Programs

ERIC #:EJ757478
Title:NAEYC Accreditation and High Quality Preschool Curriculum
Authors:Zan, Betty
Publication Date:2005

Abstract:In 1999, the Governing Board of the National Association for the Education of Young Children (NAEYC) appointed a commission to review NAEYC accreditation. Among the commission's recommendations is the goal of making NAEYC accreditation the standard-bearer of program excellence. While NAEYC accreditation is often used to support a claim that a program provides high-quality early care and education, this is not always the case. Under current accreditation criteria, a program can obtain NAEYC accreditation yet fall short of meeting the NAEYC guidelines concerning developmentally appropriate curriculum. This article analyzes current accreditation guidelines concerning the curriculum and reports results of a recent evaluation of 116 NAEYC-accredited preschool classrooms. While the mean total ECERS-R score was 5.77, classrooms exhibited a wide range of scores from inadequate to excellent on 11 curriculum-related items. Thirty-four classrooms scored in the inadequate or minimal

range (1-3) on at least one of the curriculum-related items, and 18 scored in this range on 4 or more of these items. Results are used to support the position that currently, NAEYC accreditation criteria do not adequately address the quality of the curriculum. Finally, the paper evaluates the draft accreditation criteria and makes recommendations concerning the future of NAEYC accreditation.

Journal Name:Early Education and Development
Journal Citation:v16 n1 p85-104 2005

Descriptors:Guidelines; Criteria; Preschool Curriculum; Governing Boards; Accreditation (Institutions); Educational Quality; Excellence in Education; Academic Standards; Preschool Children; Preschool Education

ERIC #:ED446851
Title:Money, Accreditation, and Child Care Center Quality. Working Paper Series.
Authors:Gormley, William T., Jr.; Lucas, Jessica K.
Publication Date:2000

Abstract:In recent years, several states have offered financial incentives to encourage child care centers and homes to become accredited by a reputable national organization to improve child care quality. This report examines whether it is good policy to offer higher reimbursement rates to accredited child care facilities and assesses the relative merits of alternative public policies that seek to improve U.S. child care. The report presents findings from an NAEYC study assessing the effects of differential reimbursement on center accreditation application rates. The study found that in a few small states, differential reimbursement boosted application rates modestly, with more substantial increases in three larger states. States with differential reimbursement policies differ in how much more they are willing to pay for accreditation, with a range of 5 to 20 percent more. The average reimbursement rate difference in states with a positive impact of differential reimbursement was 15.8 percent. The report suggests that states allow more than one accrediting organization to participate in the differential reimbursement process and describes situations in which differential reimbursement is

not likely to improve quality. Other creative procedures to improve quality are also noted, including different types of monetary incentives for accreditation, technical assistance to guide staff through the accreditation process, or requirements for accreditation. The report concludes by asserting that differential reimbursement should be considered as only one method to improve child care quality and that accreditation information should be shared with parents. The report's appendix delineates the current reimbursement rates for the 18 states with accreditation-related differential reimbursements. (Contains 16 references.) (KB)

Identifiers:Day Care Quality; Monetary Incentives; Policy Effectiveness
Institutions:Foundation for Child Development, New York, NY.

Descriptors:Accreditation (Institutions); Accrediting Agencies; Change Strategies; Day Care; Early Childhood Education; Family Day Care; Financial Support; Public Policy; State Programs

ERIC #:EJ757531
Title:A Developmental Approach to Early Childhood Program Quality Improvement: The Relation between State Regulation and NAEYC Accreditation
Authors:Apple, Peggy L.
Publication Date:2006

Abstract:Descriptive statistics were utilized to examine the relation between early childhood education and care quality indicators found in state child care regulations and the number of National Association for the Education of Young Children (NAEYC) accredited programs in the 50 states and the District of Columbia. The data analysis provided the first empirical evidence that a relation exists between the stringency of quality indicators in state child care regulations and the number of programs involved in the NAEYC accreditation process. Based on these findings, I suggest a developmental approach to quality improvements, rather than a one-size-fits-all approach. With no currently published empirical research that assists accreditation facilitation projects in explaining to funders the variations in time or levels of support needed to achieve

accreditation from program to program and from state to state, this research focused on one possible explanation for these variations.

Journal Name:Early Education and Development
Journal Citation:v17 n4 p535-552 2006

Descriptors:State Regulation; Data Analysis; Young Children; Child Care; Accreditation (Institutions); Early Childhood Education; Educational Quality; Program Improvement

ERIC #:ED256488
Title:Accreditation Criteria and Procedures of the National Academy of Early Childhood Programs. Position Statement.
Publication Date:1984

Abstract:The early childhood program accreditation system developed by the National Association for the Education of Young Children is described in this publication. Part 1 focuses on policies and procedures for accreditation (including discussion of goals and eligibility) and provides a six-step overview of the accreditation process. This process involves self-study by the applying center, reporting to the National Academy of Early Childhood Programs, validation visits to the center, consideration of the center report by commissioners, appeal by deferred centers, and maintenance of accreditation by accredited centers. Part 2 enunciates 10 criteria for high quality early childhood programs and offers interpretations of these criteria. The criteria concern interactions among staff and children, the curriculum, staff-parent interaction, staff qualifications and development, administration, staffing, the physical environment, health and safety, nutrition and food service, and evaluation. Appended materials include resource lists concerning the planning of developmentally appropriate curricula for infants and toddlers, children 2 through 5 years of age, and school-age children; a schedule for childhood immunization; child care food program recommendations of the United States Department of Agriculture; and requirements for food preparation and service. A bibliography citing literature reviewed in developing the evaluation criteria is also provided. (RH)